

<論文> 『平家物語』における清盛像(下)

著者	李 碩浩
雑誌名	日本文学誌要
巻	45
ページ	26-36
発行年	1992-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019640

『平家物語』における清盛像（下）

李 碩 浩

『平家物語』の作者が、作品の第一主人公たる清盛に対して、後半部において主人公的性格を帯びて急激に浮上してくる義仲や義経とは比較にならないほどの物語的興味を抱いていたことは、作品における清盛に関する記述の量からも容易に推測できるが、作者の清盛に対するこういった興味の背景には、清盛の「運命に対する姿勢」があったと言わねばならない。既に前章で触れたように、重盛を代弁者として現れた作者の運命観を通して見た時、清盛の運命に対する姿勢そのものは、作者の物語的興味を誘発させるには充分なものを持っていたに違いない。つまり、作者にとって清盛は、一門滅亡の運命をいち早く自覚しそれとして徹底的に投げ入れた重盛や知盛とは、全く異質な人間として映ったのである。このような異質感は三人の死の場面においてははっきり感じ取ることができる。

作品における清盛の死に方は悲惨を越えたものであった。

入道相国、やまひつき給ひし日よりして、水をだにのどへも入給はず。身の内のあつき事火をたくが如し。ふし給へる所四五間が内へ入ものは、あつさたへがたし。たゞの給ふ事としては、「あたく」とばかりなり。すこしもたゞ事とは見えざりけり。比叡山より千手井の水をくみくだし、石の船にたゝへて、それにおりてひへ給へば、水おびた、しくわきあがて、程なく湯にぞなりにける。もしやたすかり給ふと、笥の水をまかせたれば、石やくろがねなどどのやけたるやうに、水ほどばしめてよりつかず。おのづからあたる水はほむらとなしてもえければ、くろけぶり殿中にみちて、炎うづまひてあがりけり。（中略）同四日、やまひにせめられ、せめての事に板に水をゐて、それにふしまろび給へ共、たすかる心ちもし給はず、悶絶躰地して、遂にあつち死にぞし給ひける。（巻第六、入道死去）

こういう惨憺極まる清盛の死は、「運すでに尽きぬ。命はすなはち天にあり」といって医療を拒否し「臨終正念に住して」静かに死を迎えた重盛のそれとは、良い対照をなす。作者はこのような清盛の死を、「日ごろ作りをかれし罪業ばかりや獄卒となつてむかへに來りけん、あはれなりし事共なり」と、悪業の結果として得た運命の仕業と把握している。

しかし、このように決定された運命を、当の清盛はどういうふうに受容していたか。作品で見るかぎり、清盛は、自分に背負われた運命という存在の巨大な力をそれほど意識していないとみえる。そして彼は、かつて一門の全盛期にすでに運命を予知していた重盛とは対照的に、一門の滅亡の寸前にまで生きていながら、運命が様々な不吉な形で以て自分と一門に迫ってきた時には敢然とそれに立ち向かつている。清盛と運命との戦いは早くも巻第一からはじまる。「是こそ平家の悪行のはじめなれ」といわれた「殿下乗合」において、彼は「但悪行あらば、子孫まではかなふまじきぞ」（巻第三、大塔建立）という運命の予言を完全に一蹴してしまっているのである。「殿下乗合」は、重盛の次男資盛が当時の摂政基房に無礼を働きそのために乱暴され、清盛がその報復をした事件である。最初資盛からの訴えに接した清盛は「大にいかゞして」次のように言う。

たとひ殿下なりとも、淨海があたりをばはゞかり給べきに、おさなき者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かゝる事よりして、人にはあざむかるゝぞ。此事

おもひしらせたてまつらでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨奉らばや。（巻第一、殿下乗合）

清盛の怒りの理由は他でもなく、自分にはばかりもせずに一門の者に恥をかかせたところにある。「かゝる事よりして、人にはあざむかるゝぞ」という言葉からもわかるように、清盛にとって基房の行為は、資盛個人の次元を越えて平家一族を無視するものであり、結局は一族に対する挑戦にほかならなかったのである。これをそのまま放っておけば、しまいには一族の運命を左右する事態にまで発展しかねないと清盛は判断したわけである。一門の総帥たる位置にいた清盛は、他の反平家勢力に対するみせしめという意味でも、断固たる措置を取らざるを得なかったろう。保元・平治の乱を体験しながらそこから勝ち残ってきたこの老英雄にとって、世の中は食うか食われるかの殺伐たる世界にほかならない。作者はこの「殿下乗合」の事件を「世のみだれそめける根本」と評しているが、よく考えてみれば、それは平家一門の運命を担っている清盛の強い責任意識の積極的な発露とも言えるのではないだろうか。

このように一門の安危に相当の神経を使っていた清盛にとって、とうてい看過できない事件が勃発した。後白河法皇の庇護をうけていた新大納言成親が左大将になれなかったのを恨み、法皇側近の西光・俊寛等とともに謀反を企てたのである。幸い多田藏人行綱の密告により事前にこの動きを知った清盛は、何よりもまず「さて夫をば法皇もしろしめされたるか」と聞く。

清盛にとって法皇がその計画に加わっていたかどうかは大変重要な問題であつたのである。何よりも今度の謀反の首謀者が法皇の側近だということが清盛の神経を痛く刺激したのである。

もしも法皇がこれに直接的であれ間接的であれかわつてゐるとしたら、平家一門は朝敵にもなりかねない。清盛が最も心配しているのはこのことである。行綱の密告によつて心証をもつた清盛は、検非違使安陪資成を法皇のところに遣わし、その心中を伺わせる。これはもちろん法皇に対する心証をより確かなものにするためであつたが、ふだん物事をあまり深く考えない清盛としてはかなり慎重な行動といえる。まさに一門の運命を左右するような一大事に対しては、ふだんのように氣分に任せて事態を処理することは許されないわけで、しばらく眠つていた彼の武士的氣質が目覚ましはじめたのであろう。法皇のところから帰つてきた資成から報告を受け、法皇も今度の事件に一翼を担つていたという心証を固めた清盛は、即刻行動に出る。もはや一刻の猶予もできなかったのである。

一門の運命に危機感をもつた清盛の行動には凄まじいものがあった。彼はまず西光を捕らえて、「縁のきはに引よせさせ、物はきながらしやゝつらをむずく」と踏みつけたあげく、口を裂いて殺してしまふ。清盛の怒りは逮捕された成親の顔に西光の自白状を投げつける場面にもよく現れているが、重盛の説得にすぐ成親の首を斬ることは思い止まつたものの、配流地で結局は「酒に毒を入れてすゝめたりければ、かなはざりければ、岸の二丈ばかりありける下にひしをうへて、うへよりつき

おとし」(巻第二、大納言死去)で殺してしまふのである。

事件の首謀者に対するこのような無残な行為によつても清盛の怒りは収まることを知らない。彼はとうとう後白河法皇の幽閉を考えるに至る。まず彼の出で立ちを見よう。

太政入道は、かやうに人々あまたいましめをいても、猶心ゆかずや思はれけん、既赤地の錦の直垂に、黒糸威の腹巻の白がな物うゝたるむな板せめて、先年安芸守たりし時、神拝の次に、霊夢を蒙て、嚴鳴の大明神よりうつゝに給はられたりし銀のひる巻したる小長刀、常の枕をはなたず立られたりしを脇にはさみ、中門の廊へぞ出られる。そのきそくおほかたゆゝしうぞみえし。(巻第二、教訓状)

出家した身でありながら、法衣のかわりに戦闘用の服装を身につけたということは、彼の今度の事件に対する決然たる姿勢を感じさせる。清盛の意気ごみは家来の貞能に「大方は入道、院がたの奉公おもひきゝたり」と言明しているところからより明確に感じとることができるが、法皇までもが平家に背を向けた今、もはや一門を守る最善の方法は力に頼るしかないと思つたのであろう。こうして軍兵を集めたところに重盛が「烏帽子直衣に、大文の指貫そばとゝて、ざやめき」ながら入ってくる。これを見て清盛は「あはれ、れいの内府が世をへうする様にふるまふ、大に諫ばや」と思うのであるが、ここで清盛の言う「世をへうする」とは何を意味しているのかを考えてみる

必要がある。「世をへうする」とは即ち「世を軽んじる」という意味である。つまり清盛には、重盛がこの険しい世の中をあまりにも甘く見ているようにみえたのである。しかも重盛は自分を継いで一門を引っ張っていかねばならない嫡男なのである。そういう重大な位置にいる者が、このような非常時局に「烏帽子直衣に、大文の指貫」姿で登場するということは、ある意味では一門の死活がかかった現在の状況が正しく把握できていないと清盛は思ったのであろう。「成親卿が謀反は事の数にもあらず。一向法皇の御結構にて有けるぞや」という清盛の言葉は彼のこういうった心境を述べたものである。

清盛のこういう責任意識は、彼を類を見ないほどの強い人間にした。そして彼の強さは、一門の運命が危うくなった時こそ遺憾なく発揮される。またこの強さは重盛によってある程度抑えられるが、やがて重盛が死んだ後、関白をはじめとして太政大臣以下の公卿殿上人四十三人の罷免追放と法皇幽閉、都遷といった前代未聞の事件として現れるのである。都遷・法皇幽閉について作者は「凡平家の悪行においてはきはまりぬ」と評しているが、清盛にしてみれば、先月高倉宮・源頼政による謀反事件など不安の要素を抑制し、平家の基盤をより固いものにするための苦心の策であったのであろう。都を福原に遷してから「変化の物ども」が次々と出現し一門の人々が悩まされ戦々競々としている中で、清盛はそれをもとめず敢然とこれに立ち向かっている（巻第五、物怪之沙汰）。考えてみると、清盛も「鹿谷事件」や「高倉宮事件」等一連の情勢が自分に面白く

ない方向に走っているという異様な雰囲気は感じていたであろう。また自分が最も信頼していた一門の棟梁重盛が平家の没落を予見して死んだことや、源中納言雅頼のものと青侍が將軍の象徴である節刀が清盛から頼朝に譲られるという夢をみたことなどが、清盛の不安の念を一層強くしていたに違いない。しかしながら清盛はそれにくじけるどころか敢えてその不安の要素を取り除くために戦うのである。そして法皇幽閉も都遷も、彼の、傾きかけている一門の運命を元に取り戻すための必死の抵抗であり、努力だったのである。

しかしこういった清盛の抵抗とは裏腹に事態はだんだん平家に不利に展開されていく一方である。とうとう伊豆国流人源頼朝と信濃国の本曾義仲が平家に叛旗を翻したのである。そして東国北国はもちろんのこと九州・四国までもが平家に背いたという飛脚が六波羅に到来したのと時を同じくして、清盛は重病にかかる。まるで地獄の責め苦のような熱苦しい苦痛のさ中で、清盛は次のように遺言する。

われ保元・平治より此かた、度々の朝敵をたいらげ、勸賞身にあまり、かたじけなくも帝祖太政大臣にいたり、栄花子孫に及ぶ。今生の望一事ものこる処なし。たゞしおもひをく事としては、伊豆国の流人、前兵衛佐頼朝が頸を見ざりつるこそやすからぬ。われいかにもなりなん後は、堂塔をもたて、孝養をもすべからず。やがて打手をつかはし、頼朝が首をはねて、わがはかのまへにかくべし。それぞ孝養にてあらんず

る。(巻第六、入道死去)

清盛は「今生の望一事ものこる処なし」と言う。つまり、自分の生きてきた道に非常に満足しているのである。振り返ってみれば父忠盛の代から昇殿を許されて以来、保元・平治の乱を経て中央政府においての確固たる位置を確保し一門を栄華の頂点にまで引き上げたのは自分であり、自分は一門の長男としての責任を完璧に果たしたという意識から生じた満足感であろう。しかしながら彼は言う。「たゞしおもひをく事とは」云々と。自分が一生をかけて築いた一門の栄華がもはや頼朝の手により崩れ落ちようとしているのである。しかも子孫たちは長い間の栄華に溺れ、すっかり貴族化してしまっている。自分が死んだ後もしも一門が減びでもしたら、自分は死んでも死に切れないと思ったのであろう。考えてみれば清盛のこの遺言は、生の最後の瞬間まで彼が持っていた一門に対する強い執着だったのであり、弱々しくなっていく一門の人々に対する厳しい戒めだったのである。

作者はこの遺言を「罪ふか」いものと評しているが、我々はこの非運命論者としての清盛の性格の一面をかいま見ることができる。自己の生涯に対する絶対的な満足、来世否定の世界は、『平家物語』において誰も侵犯することの出来ない、非運命論者としての清盛独自の領域であった。自己に対する深い信頼、自分の行為に対する正当性賦与だけが、運命との闘争において、正面から立ち向かうことの出来る唯一の武器だということ

とを清盛は示しているといえよう。

清盛は意志的かつ戦闘的性格の人物であった。死に臨んだ時の彼の超人間的な意志と、敵対者に対する仮借なき戦闘的気質は、「殿上闇討」のような父祖以来の平家の身分階級に対する一種のコンプレックスや、平家一門と自身との一体感から来る責任意識から生じたものということが出来ると思うが、とにかく彼は、重盛や知盛のような運命論者の感傷は自分の世界に受容する事は出来なかったのである。清盛は自分の世界を守ろうと間断なく努力する一方、その世界を破壊しようとするものがあれば、それが何であれ、全力で立ち向かっていくことに躊躇しなかった。たとえそれが人間の力ではどうしようもない自然の摂理としての運命といえども。

『平家物語』には数え切れないほど多くの人物が登場しまた消えて行くが、彼らのほとんどが来世に対する強い信仰と救済を渴望している。祇王母娘のような卑しい身分から重盛、維盛、重衡等の公卿貴族はもちろんのこと、建礼門院、後白河法皇のような至尊の存在に至るまで、ほとんどの人物が現世の安寧よりは来世での救済を希求する。それは当時蔓延していた末代意識から来るもので、作者の基本思想でもある。このような来世希求の思想は、作品の展開における一つの軸になっており、また作者の意図するところの「無常的運命観」に至る必須不可欠の要件にもなるのである。しかし清盛はこの来世というもの、ものの存在を強力に否定している。前に引用した彼の遺言は、彼がどれほど死後世界を否定する現実主義者であるかを物語っ

ている。「死後の冥福よりは頼朝の首を」という発想は、現実を最も正確に把握したいかにも清盛らしい清盛だけの発想である。彼がかつて「出家入道」したのも、「やまひにをかされ、存命の為」(巻第二、禿髪)であつて、決して死後の世界に対する期待のためではなかった。彼のこういう一面は法皇幽閉問題をめぐつて清盛に教訓されて後、「内府に中たがふてはあしかりなんと」思い「腹巻ぬぎをき、素絹の衣にけさうちかけて、いと心にもおこらぬ念珠」(巻第二、烽火之沙汰)するところにもよく現れているが、だからこそ彼は、自分と一門が危ないと感じた時にはいつでも未練なく、法衣を脱ぎ捨てて武器を身につけることができたわけである。

清盛の現実主義的な一面を語ってくれるいい例を我々は「禿髪」から見る事ができる。清盛は「禿髪」といわれる少年たち三百人を京都市中に解き放ち、平家の悪口を言う人を逮捕させる恐怖政治を行った。「禿髪」は現代風に言えば一種の秘密警察みたいな存在であるが、しかしその「秘密」ならぬ「秘密警察」というところに面白さがある。つまり清盛はその「十四五六の童部」を皆そろつて「髪を禿にきりまはし、あかき直垂をきせて」京中をうろうろさせたのである。誰が見ても清盛の「禿髪」だということがすぐわかつてしまうわけである。これは例えば第二次大戦時のナチ・ドイツのゲシュタポとは趣を異にするものである。わざと人の目につく身なりをさせて一見して「禿髪」とわかるようにしたことから考えてみると、ゲシュタポみたいに暗々裏に反体制人物を索出するような暗い行為

は、清盛には性に合わなかったに違いない。それよりはむしろ表面的にでも耳障りなことが自分の耳に入らなければそれで良いと清盛は思つたのであろう。こういう性格の清盛が、現実を否定する暗い厭世主義よりは明るい現実主義に傾くのは、ある意味では当然のことと言えよう。

さて、このような現実主義的思考は清盛を、人生に対する積極的な行動型の、何事にも全力を尽くす人間へと誘導した。巻三の「大塔建立」には平家が嚴嶋を信仰するようになった由來が語られているが、そこに次のような話がある。清盛がまだ安芸守だつたころ、嚴嶋の修理を条件に將來の榮華を保証してくれた弘法大師に対するこの世の思い出にと、高野の金堂の東曼陀羅を自ら描いたが、八葉の中尊の宝冠を自分の頭の血を出して描いたという。清盛に当時の貴族たちが共通して持っていた悲觀精神がまったく見られないのは、このような現実主義者としての彼の積極性と行動力、そして情熱にその原因がある。彼は人生の贊美者ではなかったが、かといって人生の悲觀論者でもなかった。ただ彼は自分の人生を、自分にできる限りの最大の努力を傾注して熱心に生きようとした單純な人間に過ぎない。来世に対する保障などは、現実主義者の彼にとっては何の意味ももたないものであつた。ただ自分の眼の前に展開される現実、その一つ一つに対する忠実こそ彼の人生の最大の目的であり、また成功的な生を営む最善の方法であつたのである。

清盛は、以上で見てきたように、自分や一門の運命を危うくする一連の挑戦に対しては誰よりも強い一面をもっているが、

反面、自分の血族や家人に対しては柔弱で情緒的な一面をもっている。清盛のこのような面貌は特に重盛との関係によく現れている。例の「鹿谷事件」による後白河法皇処理問題をめぐった重盛との葛藤の中で、「院がたの奉公おもひき」たり」と極言を躊躇しなかった清盛も、「忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」といつて「たゞ重盛が頸をめされ候へ」と涙で訴える重盛に対しては、「いや／＼、これまでは思もよりさうず、悪党共が申事につかせ給ひて、ひが事な（シ）どやいでこむずらんと思ふばかりでこそ候へ」と「力もなげにて」下がってしまう（巻第二、烽火之沙汰）。似たような話が「少将乞請」にもみえる。「鹿谷事件」に連累されれば死罪と決まった丹波少将成経は、事件の首謀者の新大納言成親の嫡子でありながら清盛の弟の教盛の婿でもある。教盛が婿の成経の助命のために清盛を訪ねる。はじめのうちはどうしても聞いてくれようとしなかった清盛も、教盛の世を捨てるといふ脅迫に「大におどろいて」、とうとう成経の助命を許すのである。清盛の親族に対するこのような格別な愛情は「御産」「小督」からも伺うことができる。

入道相国・二位殿、胸に手ををいて、「こはいかにせん、いかにせむ」とぞあきれ給ふ。人の物申けれ共、たゞ「ともかうも能様に、よきやうに」とぞの給ける。「さり共いくさの陣ならば、是程浄海は臆せじ物を」とぞ、後には仰られける。（中略）入道相国あまりのうれしさに、声をあげてぞな

かれける。悦なきとは是をいふべきにや。（巻第三、御産）

入道相国これをき、中宮と申も御むすめなり、冷泉少将聳なり。小督殿にふたりの聳をとられて、「いや／＼、小督があらんかぎり世中よかるまじ。めしうだしてうしなはん」とぞの給ひける。（巻第六、小督）

一方清盛の重盛に対する愛情は、重盛の死とともに一層強く現れる。重盛を失った清盛の悲しみは例えば「入道相国、小松殿にをくれ給て、よろず心ぼそうや思はれけむ、福原へ馳下り、閉門してこそおはしけれ」（巻第三、法印問答）というところにもよく現れているが、清盛はその悲しみと怒りを、法皇の使者として訪れた静憲法印に向かって「且は腹立し、且は落涙し」ながら次のようにぶつけているのである。

や、法印御房、浄海が申処は僻事か。まづ内府が身まかり候ぬる事、当家の運命をはかるにも、入道随分悲涙をおさへてこそ罷過候へ。御辺の心にも推察し給へ。保元以後は、乱逆打つゝいて、君やすい御心もわたらせ給はざりしに、入道はたゞ大方を取をこなふばかりでこそ候へ、内府こそ手をおろし、身を摧て、度々の逆鱗をばやすめまいらせて候へ。其外臨時の御大事、朝夕の政務、内府程の功臣有がたうこそ候らめ。（中略）され共、内府が中陰に八幡の御幸あてて御遊ありき。御嘆の色、一事も是をみず。たとひ入道がかなしみ

を御あはれみなく共、などか内府が忠をおぼしめし忘れさせ給ふべき。たとひ内府が忠をおぼしめし忘れさせ給ふ共、争か入道が歎を御あはれみならむ。父子共叡慮に背候ぬる事、今にをいて面目を失ふ。(巻第三、法印問答)

ここで見せている清盛の涙と怒りは、愛する子息を失った父としての悲しみと、その悲しみに背を向けた朝廷や法皇に対する怒りにほかならない。ここでひとつ注目したのは「保元以後は、(中略)内府程の功臣有がたうこそ候らめ」という句節である。つまり清盛は自分自身よりも重盛を朝廷の一等功臣に挙げているのである。清盛の重盛に対する並ならぬ愛情の程度を感じさせるところである。そしてこの愛情はそのまま朝廷と法皇に対する怒りと化して、やがて「大臣流罪」「法皇被流」の形に具体化されるのである。

作品を通じて清盛の涙は三回登場する。二回は重盛の死によるもの(医師問答、法印問答)で、あと一回は安徳天皇の誕生によるもの(御産)である。「死」と「生」という全く反対の状況で見える清盛の涙は、事件の性格の差異にかかわらずある共通する意味を持っており、それは親族に対する深い愛情にはかならない。

一方清盛の血族へのこのような愛情は人間全般に対する愛情にも繋がっている。もちろんここでいう人間とは、清盛自身や一門の領域を破壊しようとするものを除いた人間で意味である。清盛が単純な好人的な人間で情的な一面の持主であ

ることは、たとえば、「入道相国はことに物めでし給ふ人」(巻第二、徳大寺之沙汰)、「入道も石木ならねば、さすが哀げにぞの給ひける」(巻第二、卒都婆流)という記述からもわかるが、何よりも彼の人間愛が感じられるところは、「築嶋」と「奈良炎上」であろう。

又何事よりも、福原の経の嶋つゐて、今の世にいたるまで、上下往来の船のわづらひなきこそ目出けれ。彼嶋は去る応保元年二月上旬に築はじめられたりけるが、同年の八月に、にはかに大風吹大なみたち、みなゆりうしなひてき。又同三年三月下旬に、阿波民部重能を奉行にてつかせられけるが、人柱たてらるべしなど、公卿御僉議有しか共、それは罪業なりとて、石の面に一切経をかひてつかれたりけるゆへにこそ経の嶋とは名づけたれ。(巻第六、築嶋)

これを見る限り、清盛から、高山樗牛のいう「極端的な個人主義、我執主義」は感じとれない。自分の目的達成のためといえども無辜の人命を害しないこういった人道主義的傾向は、作者によって極悪と認識された「奈良炎上」においても言える事である。たとえば「大なる球丁の玉をつくして、これは平相国のかうべとなづけて、「うて、ふめ」などぞ申ける」理性を失った南都の群衆に対してすら、清盛は、

相構て、衆徒は狼藉をいたすとも、汝等はいたすべから

ず。物の具なせそ。弓箭な帶しそ。(巻第五、奈良炎上)

と、兼康に命令しているのである。

実際に作品において、作者によって認識された清盛の十項目の悪行^(四)を吟味してみると、そのほとんどが挑戦に対する応戦という性格をもっていることがわかる。こういう点を念頭に置いて清盛をよく観察してみた時、清盛にとって人間は悪行の対象ではなく、むしろ愛情の対象ではなかっただろうか。

清盛には二つの顔がある。この二つの顔はその対象によってそれぞれ違う形で現れる。すなわち一つは、法皇以下の公卿貴族に対する悪行の典型的な標本としての顔であり、もう一つは、親族をはじめとした一般人間に対する原初的な愛情の所持者としての顔である。このような二つの顔を理解することによって、作者が認識している清盛像としての、

まことにはたゞ人ともおぼえぬ。(巻第六、築嶋)

の意味と、

まぢかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝承こそ心も詞も及ばれぬ。(巻第一、祇園精舎)

人のしたがりつく事、吹風の草木をなびかすが如し。世の

あまねく仰げる事、ふる雨の国土をうるほすに同じ。(巻第一、禿髪)

の相互矛盾した表現の意味が正しく把握できると思う。

以上で「運命と清盛」、「人間としての清盛」について考えてみた。それでは今まで見てきた「中世的(規範の)人間像」と「清盛像」との関係について考えを進めていくことにしよう。そのためにはまず「中世的(規範の)人間像」とはどのような人間像であるかを明らかにしておかなければならない。

「中世的(規範の)人間像」とは、言葉どおり、「中世的規範に立脚した人間の像」である。中世的規範とは「人間の力の限界に対する自覚」であるから、「中世的人間」とは即ち「人間の力の限界を自覚した人間」ということができる。ここで人間の力の限界を自覚するということは、人間の運命のむなしさを悟りその無常観の中で人生の悲哀を感じるということである。こうしてみると、結局「中世的人間像」とは、無常の運命観にとらわれ現実には悲哀を感じることによってついには来世を渴望する、いってみれば、現実悲観論者の・運命論者の人間像である。

こういう人間像が中世になって作品に主流をなして登場するようになった背景には、まず平安朝末期の院政時代から中世初期にわたって絶え間なく打ち続く戦乱と、またそれとちょうど時期を同じくして頻発した各種の天災地変等があったが、彼ら中世人の現世悲観の精神をさらに加速化したのが当時の浄土教

であつた。限りなくうち続く戦變の中で生の指標を失つて彷徨した彼らにとって、浄土往生の思想は大きなよりどころになつたのであらう。そして自然に彼らは現実を否定し来世を渴求するようになり、所謂末代意識の中で、中世的規範としての無常的運命觀と悲哀感はいだいに彼らの生活感情となつていったのである。「中世的人間像」はこのような時代の産物として生み出された人間群像である。

このように無常の運命觀と情緒的悲哀感が人々の生活感情になつて行き、中世の作品において一つの規範として定着されて行く中で、中世の代表的な文学作品である『平家物語』において清盛はどのような位置を占めているのか、言い換えれば、「中世的人間像」と『平家物語』における清盛像とはどういう関係にあるのかを、今までの考察を通じて整理して見よう。

まず清盛は運命觀において「中世的人間」とその態度を異にする。「中世的人間」は運命を運命そのままに解釈し、自分の世界にこれを受入れ無條件的に受け入れているのに対して、清盛は最初から運命という存在を無視しており、その運命がある挑戦の形で以て自分と一門にのしかかつてきた場合には敢然とこれに立ち向かつて戦っている。

また清盛は死後世界即ち来世を否定する点において「中世的人間」と性格を異にする。極めて現実主義者であつた彼は、常に現実に忠実な楽天主義者として、自分の最大の努力を傾注して毎事に精進し、それによって自ら満足を得る。遺言にもよく

現れているように、現実を度外視した来世など彼にとっては何の意味ももたないものであつた。またこの現実優先の思考は彼を積極的な行動型の人間へと導いていく。

一方清盛は情感に富んだ人間でもあつた。彼の人間に対する情は、「中世的人間」のもつ悲哀的な憐憫の情とは性質を異にする、人間に対するより根源的な愛情であつた。清盛のこういう愛情は彼の現実的かつ樂天的な性格から生ずるもので、悲觀的かつ厭世的な「中世的人間」のそれとは違うものである。

こうしてみると『平家物語』における清盛像は、無常の運命觀と来世希求思想、それから情緒的悲哀感にとらわれていた「中世的人間像」からかけ離れた、また異なるところに位置づけられていると見ることができる。つまり、『平家物語』において清盛のもつ人間像の意味は、当時のほとんどの人間を束縛していた「中世的規範」からかけ離れた異質的な人間像としての意味である。清盛は無常の運命觀からも、厭世的悲觀論からも、また情緒的悲哀感からも自由な唯一の——少なくとも『平家物語』においては——自由人であつたのである。こういう意味から考えてみる時、中世的觀念にとらわれていた作者や当時の人々にとって、神からも運命からも自由な清盛という存在が、驚異と畏敬の対象になるのは当然の事だったかもしれない。

注

- 一、拙稿「『平家物語』における清盛像（上）」（『日本文学誌要』四四号 一九九一・三）をみらいたい。
- 二、高木市之助、永積安明、市古貞次、渥美かをる 増補国語国文学研究史大成（九）『平家物語』三省堂 昭和五十二年 九十一頁。
- 三、注一に同じ。

（い そくほ・大学院博士過程二年）